

講義余聞

先生の趣味・特技

法学部 小室夕里 准教授

動物愛護

犬猫の「預かりさん」
大震災で被災した犬も

東日本大震災で被災した犬を預かっている。その名は「フクシマ君」。東京電力福島第1原子力発電所から20キロ圏内で4月半ばに保護されたのを、5月4日に預かった。「被災動物への募金というかたちではなく、今すぐ自分にできること」と考え、家族の一員として預かることにした。小室夕里先生は、犬猫の「預かりさん」だ。個人または団体ボランティア

アが、動物愛護センターに遺棄された動物のなかから引き取った犬猫を、医療ケアを施したあとインターネットの専門サイト『いつでも里親募集』に写真付きで紹介。その犬猫を、小室先生は一時的に預かる活動をしている。時には虐待された経験を持つ犬や猫に新たな飼い主が見つかるまでの間、一緒に暮らして、愛情を注ぐ。ただ預かるだけでなく、新たな飼い主希望者があらわれたら、「しっかり愛情を注いでくれるか、飼い主の資格があるかどうかを判断」して

決める。「預かりさん」は、不幸な目にあった犬猫を幸せな生活へ案内するエンジェルだ。

現在、全国の動物愛護センターに届けられた犬猫のうち、引き取り手が現れず、即日から一週間前後

で殺処分されてしまう数は年間30万匹近くにのぼる。飼い主のいないペットを保護するシェルターは公共施設としては存在せず、NPOやボランティア団体、一般家庭での引き取りに頼っているのが現状だ。

小室先生が今預かっているのは犬の「フクシマ君」で、ほかに、遺棄されたところを保護された猫を2匹飼っている。「1匹でも多くの犬猫を救いたい。でも逆に言うと、年間に殺処分される30万匹のうち、私が命を救っているのはわずか数匹だから、非常に残酷なことをしているこ

とには変わりはない」。こう言って、小室先生は現状を憂える。

留学先で活動を知る
複数の保護団体に登録

「預かりさん」の活動を知ったのは、大学院生のときの留学先のイギリスで友人がシェルターから連れてきた1匹のラブラドル犬との出会いだった。「前の飼い主から虐待を受けていたせいか、終始人を怖がってびくびくしていた。その犬に1年後また会ってびくびくり。とつても明るい性格になっていったの。人が好き



小室夕里准教授

になったのね」。これがきっかけで、日本でも同じ活動はないかと関心を持つようになった。

2004年3月、ペット可のマンションに引っ越した小室先生は、「犬を飼うのではなくて、預かることならできるかもしれない」と考え、複数の犬猫保護団体に登録した。「いま考えると非常に安易な発想だっ

た」というが、「子犬や小型犬を預かりたい」とやる気は満々だった。しかし、子犬や小型犬への希望者が多く、連絡待ちの毎日が続いた。

そんなある日、団体から「猫はどうですか」という連絡が入った。「当時の私は猫が大嫌いで興味もなかった。当然、飼い方もわからないからためらいました」という。「5〜6

月は猫の繁殖シーズンだから、たくさんの子猫が保護されていたの。団体としては1匹でも多く救いたいと必死だった」という。

「団体から「大丈夫だから」と説得され、小室先生自身も「困っている人を放っておけない」と考えて、生後1か月の子猫を預かった。手のひらに乗せた瞬間、「めっちゃかわい」と愛情がこみ上げた。その子猫は1週間ほどで新たな飼い主が見つかった。

「無理しない」がルール 楽しみは「飼い主との輪」

それからというもの、20匹以上の犬猫を「預かりさん」している。「『無理をしない』が絶対のルール。自分の気持ちや生活に余裕があるときでないとダメ。そして、どんなに犬猫を大切に思っても、楽しさと人に対する思いやりがないと絶対に続かない」。小室先生は、力強いまなざしでそう強調する。

「楽しさ」とは、「預かった犬猫が元気になった姿を見る」ことであり、活動を通して「人の輪が広がる」ことだという。「素敵な飼い主さんと出会うと嬉しい。いろんな年齢や職業の人がいて、そこで生まれる楽しい関係が私の財産」と言って表情を崩す。飼い主さんからは定期的の様子を聞いたり、相談を受けたりするので、お互いに長い付き合いになる。「少しでも不安を覚える相手には、犬猫は渡しません」と断言する。

「人間が犯してしまった虐待行為によって、犬猫は心に大きな傷を負っています。犬によっては、感情を伝える手段のひとつである吠える行為ができなくなることもある。人の身勝手な殺されてしまう犬猫をなくしたい。将来、預かりさんという活動がなくなることが一番の願いです。そう話す小室先生の目はとても優しく輝いていた。

（学生記者 中野由優季 法学部2年）



被災犬の「フクシマ君」と